

日本型アカデミック・アドバイジングの挑戦①

政策において推進されるアカデミック・アドバイジングは、日本の大学教育にどのような変化をもたらすのであろうか。シリーズ連載「日本型アカデミック・アドバイジングの挑戦」の初回として、愛媛大学の全学的な教育の企画とアカデミック・アドバイジングの運営を行う同大学教育・学生支援機構学習支援コンソンス長の中井俊樹氏に、日本の大学におけるアカデミック・アドバイジングの意義について紹介してもらう。

アドバイジングへの注目 しながら必要な支援を受ける学生が多様化が進むなか、一人ひとりの学習を支える教育的活動であるアドバイジングが大学の重要な課題となっている。この考え方は、米国のこれまでのように、学生が自ら履修を組み立てる自律的な学習を前提とするのではなく、十分な学習につなぐべく、セスとは、単位修得や卒業だけを指すのではなく、大学が大学での学びの教育的責任がこれまでに求め、将来の進路や社会生活へ円滑に移行していく一連の成長過程を捉える考え方である。アドバイジングは、この理念を具現化する実践であり、大学教育の中核にあり、大学教育の中心に置かれるべきである。

政策における位置づけ このような必要性は、近年の高等教育政策にも示されている。2025年2月の中央教育審議会



アカデミック・アドバイジングの意義

評価され、文部科学省のミッション実現加速化経費（教育研究活動充実分）により予算措置された。私立大学では、令和7年度の私立大学等改革総合支援事業の中で、「アカデミック・アドバイジングの体制の整備」が具体的な設問項目となった。アドバイジングが個別大学の工夫にとどまらず、教育改革や学習支援体制の充実を評価する政策上の観点になっていくことを示している。

しかし、実際には、カリキュラムの構造を十分に理解できないまま履修を選択したり、目先の都合だけで履修を選んだりすることもある。「単位が取れる履修を受ける」「1限の履修は避けたい」といった安易に履修を選択し、卒業後に「学生時代にもっと学習しておけばよかった」と考える者も少なくない。

アドバイジングは、そのような状況において学生自身が自らの学習を設計できるように支援する計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

政策においてアドバイジングの重要性が示されたとしても、それが大学の体質性、学修成果の可視化、教学マネジメントの確立が重視されている。ただし、制度を整えるだけでは十分ではない。学生がカリキュラムをどのように理解し、どこで困難を感じ、どのような支援が必要としているのかを把握しなければならない。制度は実際の学習の改善につながらない。

アドバイジングは、学生自身が自らの学習を設計できるように支援する計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

政策においてアドバイジングの重要性が示されたとしても、それが大学の体質性、学修成果の可視化、教学マネジメントの確立が重視されている。ただし、制度を整えるだけでは十分ではない。学生がカリキュラムをどのように理解し、どこで困難を感じ、どのような支援が必要としているのかを把握しなければならない。制度は実際の学習の改善につながらない。

策で求められているから必要である」と説明しても、現場の納得は得にくく、形骸化につながるおそれもある。そうではなく、初年次学生のみならず、履修の複雑化、休学や留年、進路選択の迷いなど、現実を抱えている問題と結びつけて説明することが重要である。現場の課題を解決する具体的な手段として提示されなくては、制度の重要性が理解される。さらに、役割分担の明確化も合意形成において必要である。専門のアドバイザーを配置する大学が全

答申「我が国の『知の総和』向うの未来像では、

「教員と同等の立場で学生の学修者本位の学びを支える職員をアカデミック・アドバイザーとして配置することも視野に入

計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

生々の学習の過程に寄り添った1割程度にとどまらず、履修の体系性を理解している状況である。専門のアドバイザーを確保するために、養成の体制とキャリアパスの確立も必要となる。

第2に、業務負担への懸念である。十分な人数の専門のアドバイザーを配置できない場合、既存の教職員にとつて新たな業務負担として受け止められ、業務を担っている中

で、アドバイジングを学内で定着させるには、丁寧な合意形成が不可欠である。まず必要なのは、なぜ導入するのかという意義の共有である。アドバイジングを、成績不振者などの一部の学生を対象とした対策として捉えるのか、それともすべての学生の学習を支える基盤として位置づけるのかによって、制度設計は大きく異なる。

また、現場の課題との接続も必要である。「政

の転換が求められる現在、学生一人ひとりの学習経験に目を向け、その成長を支える営みは、大学教育の中心に置かれるべきである。

政策において推進されるアカデミック・アドバイジングは、日本の大学教育にどのような変化をもたらすのであろうか。シリーズ連載「日本型アカデミック・アドバイジングの挑戦」の初回として、愛媛大学の全学的な教育の企画とアカデミック・アドバイジングの運営を行う同大学教育・学生支援機構学習支援コンソンス長の中井俊樹氏に、日本の大学におけるアカデミック・アドバイジングの意義について紹介してもらう。

アドバイジングへの注目 しながら必要な支援を受ける学生が多様化が進むなか、一人ひとりの学習を支える教育的活動であるアドバイジングが大学の重要な課題となっている。この考え方は、米国のこれまでのように、学生が自ら履修を組み立てる自律的な学習を前提とするのではなく、十分な学習につなぐべく、セスとは、単位修得や卒業だけを指すのではなく、大学が大学での学びの教育的責任がこれまでに求め、将来の進路や社会生活へ円滑に移行していく一連の成長過程を捉える考え方である。アドバイジングは、この理念を具現化する実践であり、大学教育の中核にあり、大学教育の中心に置かれるべきである。

しかし、実際には、カリキュラムの構造を十分に理解できないまま履修を選択したり、目先の都合だけで履修を選んだりすることもある。「単位が取れる履修を受ける」「1限の履修は避けたい」といった安易に履修を選択し、卒業後に「学生時代にもっと学習しておけばよかった」と考える者も少なくない。

アドバイジングは、そのような状況において学生自身が自らの学習を設計できるように支援する計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

政策においてアドバイジングの重要性が示されたとしても、それが大学の体質性、学修成果の可視化、教学マネジメントの確立が重視されている。ただし、制度を整えるだけでは十分ではない。学生がカリキュラムをどのように理解し、どこで困難を感じ、どのような支援が必要としているのかを把握しなければならない。制度は実際の学習の改善につながらない。

アドバイジングは、学生自身が自らの学習を設計できるように支援する計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

策で求められているから必要である」と説明しても、現場の納得は得にくく、形骸化につながるおそれもある。そうではなく、初年次学生のみならず、履修の複雑化、休学や留年、進路選択の迷いなど、現実を抱えている問題と結びつけて説明することが重要である。現場の課題を解決する具体的な手段として提示されなくては、制度の重要性が理解される。さらに、役割分担の明確化も合意形成において必要である。専門のアドバイザーを配置する大学が全

で、アドバイジングを学内で定着させるには、丁寧な合意形成が不可欠である。まず必要なのは、なぜ導入するのかという意義の共有である。アドバイジングを、成績不振者などの一部の学生を対象とした対策として捉えるのか、それともすべての学生の学習を支える基盤として位置づけるのかによって、制度設計は大きく異なる。

また、現場の課題との接続も必要である。「政

政策において推進されるアカデミック・アドバイジングは、日本の大学教育にどのような変化をもたらすのであろうか。シリーズ連載「日本型アカデミック・アドバイジングの挑戦」の初回として、愛媛大学の全学的な教育の企画とアカデミック・アドバイジングの運営を行う同大学教育・学生支援機構学習支援コンソンス長の中井俊樹氏に、日本の大学におけるアカデミック・アドバイジングの意義について紹介してもらう。

アドバイジングへの注目 しながら必要な支援を受ける学生が多様化が進むなか、一人ひとりの学習を支える教育的活動であるアドバイジングが大学の重要な課題となっている。この考え方は、米国のこれまでのように、学生が自ら履修を組み立てる自律的な学習を前提とするのではなく、十分な学習につなぐべく、セスとは、単位修得や卒業だけを指すのではなく、大学が大学での学びの教育的責任がこれまでに求め、将来の進路や社会生活へ円滑に移行していく一連の成長過程を捉える考え方である。アドバイジングは、この理念を具現化する実践であり、大学教育の中核にあり、大学教育の中心に置かれるべきである。

しかし、実際には、カリキュラムの構造を十分に理解できないまま履修を選択したり、目先の都合だけで履修を選んだりすることもある。「単位が取れる履修を受ける」「1限の履修は避けたい」といった安易に履修を選択し、卒業後に「学生時代にもっと学習しておけばよかった」と考える者も少なくない。

アドバイジングは、そのような状況において学生自身が自らの学習を設計できるように支援する計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

政策においてアドバイジングの重要性が示されたとしても、それが大学の体質性、学修成果の可視化、教学マネジメントの確立が重視されている。ただし、制度を整えるだけでは十分ではない。学生がカリキュラムをどのように理解し、どこで困難を感じ、どのような支援が必要としているのかを把握しなければならない。制度は実際の学習の改善につながらない。

アドバイジングは、学生自身が自らの学習を設計できるように支援する計である。自分の目標を言語化し、カリキュラムや履修の意味を理解し、つまずきを振り返りながら次の行動につなげることを支援する点に、その教育的意義がある。アドバイジングは、学生の依存を生む制度ではなく、むしろ自律を育てるための制度として理解するべきである。

策で求められているから必要である」と説明しても、現場の納得は得にくく、形骸化につながるおそれもある。そうではなく、初年次学生のみならず、履修の複雑化、休学や留年、進路選択の迷いなど、現実を抱えている問題と結びつけて説明することが重要である。現場の課題を解決する具体的な手段として提示されなくては、制度の重要性が理解される。さらに、役割分担の明確化も合意形成において必要である。専門のアドバイザーを配置する大学が全

で、アドバイジングを学内で定着させるには、丁寧な合意形成が不可欠である。まず必要なのは、なぜ導入するのかという意義の共有である。アドバイジングを、成績不振者などの一部の学生を対象とした対策として捉えるのか、それともすべての学生の学習を支える基盤として位置づけるのかによって、制度設計は大きく異なる。

また、現場の課題との接続も必要である。「政

愛媛大学 中井俊樹

制を構築する取組として

とが期待される。

アドバイジングには、

日本の大学における課題

の業務を担っている中

で、アドバイジングを学

内では、アドバイジング

の形成につながるであ